

行列の固有値問題

- ヤコビ法
- ハウスホルダー法
- 累乘法

固有値問題

【定義】 n 次正方行列 A に対し, $A\mathbf{x} = \lambda\mathbf{x}$ となる実数 λ とベクトル $\mathbf{x} \neq \mathbf{0}$ が存在するとき, λ を A の固有値とよび, \mathbf{x} を固有ベクトルとよぶ.

$$(A - \lambda I)\mathbf{x} = \mathbf{0}$$

$$A \text{ が固有値 } \lambda \text{ をもつ} \Leftrightarrow \det(A - \lambda I) = 0$$

【行列の固有値問題】

入力: n 次正方行列 A .

出力: A のすべての固有値 λ ,
および λ に関する固有ベクトル \mathbf{x} .

固有値を変えない変換

M を任意の n 次正方行列とし,
 $\mathbf{y} = M\mathbf{x}, A' = MAM^{-1}$ とする.

$$A\mathbf{x} = \lambda\mathbf{x}$$

$$\Leftrightarrow MA\mathbf{x} = \lambda M\mathbf{x}$$

$$\Leftrightarrow (MAM^{-1})M\mathbf{x} = \lambda M\mathbf{x}$$

$$\Leftrightarrow A'\mathbf{y} = \lambda\mathbf{y}$$

A を MAM^{-1} に替えても
固有値は変わらない.

実対称行列に対する固有値問題

- 実対称行列の固有値問題は解きやすい.
 - 固有値が実数になる.
 - 固有ベクトルが互いに直交する.
- 実対称行列に対して固有値問題を解く際の, 代表的な解法.
 - ヤコビ法.
 - ハウスホルダー法.
- いずれも固有値を変えない変換を繰り返し適用.
 - ヤコビ法: $MM^T = I$, すなわち $M^{-1} = M^T$
 - ハウスホルダー法: $MM = I$, すなわち $M^{-1} = M$

累乗法 (べき乗法)

- 一般の(対称行列に限らない)行列に対する固有値問題を解く.
- 収束はあまり速くないが, 行列の疎性を活用できるので, 高次元の問題に適す.
- 最大固有値から順に1つずつ計算.

計算手順

- (1) n 次元ベクトル \mathbf{x}_0 を適当に選ぶ.
- (2) $k = 1, 2, \dots$ に対して以下を実行.

$$\mathbf{u}_k = \frac{\mathbf{x}_k}{|\mathbf{x}_k|} \quad \text{単位ベクトルに正規化}$$

$$\mathbf{x}_{k+1} = A\mathbf{u}_k$$

- (3) 収束したら, $\lambda = (\mathbf{u}_k, \mathbf{x}_{k+1})$ によって固有値を算出.

補足

累乗法は, 基本的には, $\mathbf{x}_{k+1} = A\mathbf{x}_k$ を繰り返せばよいのだが, k が増大すると,

$|\lambda| > 1$ ならば $|\mathbf{x}_k|$ が増大して桁溢れを起こし

$|\lambda| < 1$ ならば $|\mathbf{x}_k|$ が減少して桁落ちを起こす.

これを避けるために,

$$\mathbf{u}_k = \frac{\mathbf{x}_k}{|\mathbf{x}_k|}$$

$$\mathbf{x}_{k+1} = A\mathbf{u}_k$$

のように, 単位ベクトル化してから計算を行う.

アルゴリズムの根拠

n 次正方形行列 A の相異なる固有値を絶対値の大きい順に

$\lambda_1, \dots, \lambda_m$ とし, 対応する固有ベクトルを

$\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_m$ とする. いま, ベクトル \mathbf{x}_0 を

$\mathbf{x}_0 = c_1\mathbf{v}_1 + \dots + c_m\mathbf{v}_m$ とする. このとき,

$$\mathbf{x}_k = A^k\mathbf{x}_0$$

$$= c_1\lambda_1^k\mathbf{v}_1 + \dots + c_m\lambda_m^k\mathbf{v}_m$$

$$= \lambda_1^k \left(c_1\mathbf{v}_1 + c_2 \left(\frac{\lambda_2}{\lambda_1} \right)^k \mathbf{v}_2 + \dots + c_m \left(\frac{\lambda_m}{\lambda_1} \right)^k \mathbf{v}_m \right)$$

$$\frac{\mathbf{x}_k}{\lambda_1^k c_1} \rightarrow \mathbf{v}_1 \quad (k \rightarrow \infty)$$

前提となる条件

(1) ベクトル \mathbf{x}_0 が

$$\mathbf{x}_0 = c_1 \mathbf{v}_1 + \cdots + c_m \mathbf{v}_m, \quad c_1 \neq 0$$

と書けること .

(2) 各 $i = 2, \dots, m$ について $\left| \frac{\lambda_i}{\lambda_1} \right| < 1$ であること .

(1)は必ずしも保証されないので、
多数回繰り返して収束しない場合は
出発値を取り替える .